

大丈夫の思い込みが 生死を別けた

岩手県釜石市消防団

本部 分団長

鈴木 堅一 (68才)

消防団歴 34年 (無職)



釜石市の概要と被害状況

釜石市は、岩手県の南東部、陸中海岸国立公園のほぼ中央に位置し、東は太平洋に面し、西は遠野市と住田町、南は大船渡市、北は大槌町に隣接する。市域は東西29.6km、南北31.8kmで、総面積は441.43km²、人口は3万7,907人、世帯数は1万7,061世帯(平成24年2月末現在)である。気候は、三陸沿岸に位置しているため、海洋の影響と地理的条件から四季を通じて温暖である。釜石市は、わが国近代製鉄発祥の地として、また、三陸漁場の中心港として、「鉄と魚のまち」として発展してきた。

3月11日の大地震では、釜石市の只越町で5強、中妻町で6弱を観測した。人的被害は、死者888人、行方不明者158人、負傷者不明、住家被害は全壊2,955棟、半壊693棟となっている。

釜石市消防団は、8分団37部から構成され、団員数は768名(女性団員28名、機能別団員40名含む)。各部にポンプ自動車か小型ポンプ積載車が1台配備されている。

背後まで押し寄せた津波

自宅は、店をやっており、家族は、妻と息子夫婦と孫(娘)である。大震災発生時は、2階建て



釜石市市内の被災状況(岩手県消防協会提供)

の家の1階におり、妻とテレビを見ていた。2階には息子夫婦がいた。揺れは、底から突き上げられてくるような縦揺れがすごく、津波は絶対来ると思った。私と息子は、一緒に家を出て、私は水門を閉めに、息子(消防職員で非番だった)は、娘を迎えに直ぐに小学校に向かった。

第6分団では、地震時は、地域にある水門閉鎖が優先される。高さ5mくらいある防潮堤の間に大きな水門1つと、小さい水門が3つある。水門閉鎖は、町内会と消防団と一緒に閉鎖することになっている。水門に到着した時は、分団第1部の部長が先に着いており、水門を閉鎖していた。その後、防潮堤の付近に行ったら、コンクリートの波消しブロックの端から水が水圧で吹き上がっていた。ちょっと見たら、ボートが防潮堤の上を越えようとしていて、ただごとではないと思った。

第1部部长に「早く来い」と手招きされ、道路まで来たら、後ろのほうからボンと津波がき

た。津波は、電柱が見えなくなるほどの高さだった。何秒か遅かったらさらわれていた。波が下から来る。障害物は押し上げられて来る。波が膝あたりまでくると、どんな丈夫な人でも転ばされる状況だった。

第1部部長が水門閉鎖した後、ポンプ車で広報を行っている。地区を2回くらい周り、小学校にも寄って、避難を呼びかけている。特に、小学校は、第1部部長が機転をきかせて、先に団員を2名行かせ、「早く避難させろ」と呼びかけ、さらに、ポンプ車を小学校に向かわせて、ポンプ車で「高台へ早く逃げろ」と呼びかけたので、小学校の児童は助かったと思う。その後、中学生がさらに上に連れて逃げている。

当時、住民はなかなか避難しなかった。助かった人も、間一髪の人が多く、波に追いかけられながら逃げた。何かを忘れて取りに戻ったりして逃げ遅れた人が多いようだ。なお、市の防災行政無線から「津波が発生、4m」の放送を1回だけ聞いており、その後は、防災行政無線もダウンしている。

その後の避難と地震当日の行動

その後、我々は車で峠に逃げたが、津波は杉山の中を追いかけてくるようで、足が震えた。峠に着いてから海を見ると、引き潮となっており、沖合1kmほどまで潮が引いた。普段は見えない海の底が見えていた。津波が引く時には、壊れた家が行儀良く並んで、ゴーツとすごい音をたてて流れていった。また、瓦礫や流木が湾で渦巻いていた。

分団担当地区のうち、根浜地区は第2波で全滅した。また、第3波が来るちょっと前に箱崎地区を見に行くと地区の半分が持って行かれていた。

津波で浸水した地区では、ホースが切られたままのガスボンベが流されていて、周りはガスの臭いがした。たぶん、プロパンガスから漏れたものと思われたが、火がつかなかったのは幸いだった。



箱崎地区の被災状況（岩手県消防協会提供）

た。しかし、対岸にある大槌町赤浜地区では、我々が水門閉鎖に行った時には、すでに火が2箇所から出ていた。途中、箱崎地区ですっかりずぶぬれになった知り合いが、火を焚いてくれと叫ぶが、ガスのにおいがひどかったので、「勘弁してくれ。もう少しがまんしてくれ」と言った。

16時30分頃だったと思うが、自動車が走れる状態ではなかったので、車を山に置いて、徒歩で山を3つ越え、19時頃に鶴住居の釜石東中学校の前の山に着いた。途中、18時30分頃、宝来館（旅館）の状況を確認するため、一旦、山を降りたとき、津波が再び来襲し、山に上がって避難した。この時も、バリバリ、バリバリと音がしてきて、足先50cmのところまで津波が迫った。宝来館には行けないため、中学校の前の山に上がった。鶴住居地区は浸水していて、一面、光っていた。これはだめだ、終わりだと思った。

それまでは、第1部部長と第6分団本部長、私の3名が共にしていたが、途中から山で働いていた人と一緒に鶴住居地区まで山越えをすることに



「釜石の奇跡」の場となった釜石東中学校周辺
(岩手県消防協会提供)

なった。鵜住居地区は瓦礫でまともに歩けない状態で、途中でクギが足にささって痛かったが、緊張で我慢できた。19時半頃に神社に着き、裏山に上がった。この山を降りると3名とも家が近いので、第1部部長と第6分団本部長の2名は、その後、常楽寺に行くことになった。

浸水した地区は、家の屋根だけが少し見える程度で、途中、6人ぐらゐが鵜住居郵便局の屋根に上って助けを求めているが、助けることができないので、明日までがんばるように声をかけて、その場を離れた。道路のないところを歩き続けた。途中、仲間は腹が減ったため、30分くらい食糧がないかあたりを探し回ったが、自分はその場で休んでいた。山を登っていた途中に冷蔵庫を見つけ、その中からヤクルトを見つけて飲んだ。最高においしかった。あともう一息で常楽寺に着くから頑張ろうと思った。

22時30分頃に常楽寺に着くと、地区の人たちが火を燃やしていた。すると、大槌町の方面では大規模な火災が発生しているのが見え、ガス爆発のようにボンボンと音を立てて燃えていた。濡れた衣服を乾かしながら、仲間と明日は応援に行くことになると話した。その時、自分たちに連絡手段がないことに気付いたため、団本部長を屯所に向かわし、家族が心配だろうから様子を見てくるように言った。また、墓地の脇にある老人ホームの人たちの避難が必要となり、明日以降に避難させることとした。翌日、被害がなかった第5分団が応援に来てくれ、老人ホームの人たちを避難させた。第5分団は、この後、霊柩車の先導などもや

ったようだ。

地震発生後しばらくは、釜石の中心部とは全然連絡が取れず、車もなかった。そのため、釜石地区は自分の分団で対応するだろうと思い、こちらは、分団本部の分団長、副分団長、各部長たちで分団の本部を作った。結局、防災センターの脇に本部を設置し、3か月くらい活動した。そのまま、屯所に3か月間、寝起きをすることになる。電気は発電機から、水は地下水を汲み上げて使った。団員16名のうち、10名はコンクリートの上にゴザを敷いて寝るといった状態であった。自分がここで寝泊まりするから、皆も協力してくれと声をかけた。

11日間着の身着のまま活動

2日目から、遺体の確認と5部の部長のトラックで遺体搬送を行った。はたして消防団がやらなければならないことなのかとも思ったが、「消防団、お願いします」と言われると引き受けざるを得なかった。自衛隊が次々と壊れた家から遺体を捜索・搬送し、その遺体を団員が身元を確認するという手順だった。

60人くらいを確認したが、水の中に入った遺体は身元の確認が難しく、さらに1週間も経てば全然わからなくなる。この捜索活動は何日も続いた。また、被害のなかった第5分団は、第6分団の屯所を本部にして活動を行い、活動の指示は無線で行った。燃料はポンプ車で市役所に取りに行っている。10日目くらいは、とにかく誰もが疲れており、しゃべらなかつた。ただ、真剣になってやっていた。

分団本部のそばに遺体安置所があり、遺体は、安置所は並べているだけだった。水に入った遺体は、損傷が激しく、身内でもわからない。最初、警察の人に「消防団の方、確認してください」と言われ、受けてしまったのが悪かったようだ。また、防災センターで亡くなった人が60人くらいいたが、人間だと思わず、石ころだと思わなければ

やれなかった。何日目かに、遺体確認だけは消防団をはずしてくださいと頼んだ。

家に取り残された人の捜索活動は水門を開けて、水が引いてから行っている。2日目に、防災センター長に水が引かないので、水門を開けるように頼むが、「まだ警報がでているので、開けられない」と言われた。しかし、小学校も中学校も水浸しだったため、水を抜くことにした。水門を開け閉めするところの橋が壊れていたもので、若い人を連れてきて何とか開けてもらった。5日目あたりで、水が抜けた。

3日目くらいに自衛隊が入って来て、地元の建設業者と一緒に、道路啓開を手伝った。自衛隊には感謝している。最初は住宅地図を持って案内し、一緒に捜索を行っていたが、そのうち、自衛隊が慣れてくると、現場案内は必要なくなり、自衛隊も独自に動いた。

4日目の夜中に大槌町の火災が山越えで迫ってきた。住民から、家1軒を守ってくれと言われたが、その場所には水利が無いため、消火器4個で消火を行った。明日まで延焼はせずに大丈夫だろうと思ったが、翌朝には焼失してしまい、トタンだけしか残っていなかった。大槌町からの山火事は、大分県の緊急消防援助隊が対応している。水利を川から確保するため、20本くらいのホースを延長しているが、対応が早くて感心した。また、箱崎地区でも1件火災が起きている。

家族の死をけじめにして活動

地区内を自動車が通れるようになったので、4日目に家に戻った。家を見たら、もう終わりだなあと思った。その後、息子の車、嫁の車がそれぞれ見つかり、妻、息子夫婦、孫は自宅2階へ避難して津波に巻き込まれたようで、4人が発見され死亡が確認された。盛岡で火葬の場所が見つかり、11日目に火葬し、18日目に葬儀を行い、けじめがついた。

何で自分は消防団をやっているのだと、たまに



根浜地区の被災状況（岩手県消防協会提供）

考えることはあるが、消防団に出ず、家にいたとしても助けられたかと言えば、助けられなかっただろうと思う。

1週間後、第6分団第5部の屯所を第6分団の本部とした。携帯電話が繋がらなかったため、ポンプ車積載の消防無線で連絡をとっている。市の消防本部は被災しているので、第7分団第1部の屯所が中継局となって連絡体制をとっていた。無線はずっと機能していた。

11日間、着の身着のまま活動していた。第5部の部長の家族が、知人の家の風呂を世話してくれ、迎えに来てくれた。あ那时的風呂は最高で、ありがたかった。屯所に寝泊まりしていたので、消防団にも食糧・物資を分けてくれとお願いしたが、市役所の担当者に住民用だからと断られた。その後、担当者が謝罪に来て、分けてもらえるようになった。また、室浜地区では、住民向けの物資が多く届いているとのことで、そこから食べるもの分けてもらった。なお、最初の頃は、避難所に物資も運んでいた。

甚大な被害を受けた第6分団

第6分団では、第6部の部長が水門を閉めたあと、遠隔操作室が浸水してしまったため殉職している。分団の第3部、第4部、第6部の団員の家族に死者・行方不明者がおり、幹部でも第4部の部長は奥さんと親、第7部の部長も奥さんと親を亡くしている。さらに、ほとんどの団員は自宅を

失っている。ポンプ車は第6分団で4台が流失し、屯所は第5部以外、すべて被災している。特に、第3部の屯所は、以前の屯所が津波による浸水の危険があったため、新たに移転した直後に被災した。

大丈夫の思い込みが生死を別けた

鵜住居地区で800人位が死亡、170人位が行方不明になっている。鵜住居地区の人は、まさかここまで津波来るとは思わず、住民の避難が遅れたようだ。釜石東中学校は「津波てんでんこ」を教訓に、訓練等を一所懸命やっていたから助かった。「逃げろ、津波が来た」と言っても、ここまでは来ないからと逃げなかった人は間違いなくやられた。そのため、死者・行方不明者が多くなった。安否確認は、生きた人を数えたほうが早いという状況の中、団員はよくやってくれたと思う。

なお、大震災2日前の3月9日の地震は、揺れが大きくても津波はこないと思った。去年のチリ地震津波もこんなものかという感じだった。このチリ地震津波の時も、最初は引き波だったが、大したことはなかった。しかし、大震災の揺れでは、誰もが大きな津波が来ると思った。この地区は、明治・昭和の三陸地震の時は家がほとんどなく、近年になって家が増加した地区で、伝承等はない地区だった。

部存続の危機、組織の再編が必要

団の活動では、いろいろと軋轢は生じた。第2部（両石地区）では、部長が辞めると言ったため、部長に、「とにかく頑張れと。おれも頑張るから、おまえも頑張れ」と説得をしている。ただし、被害の大きい地区の部では、団員がいなくなってしまう問題がある。当初は部に5、6名の団員がいたが、だんだんバラバラになり、最後は部長だけになったところもある。このままでは、消

防団も持たない感じである。また、現場で団本部の幹部と活動の指示についての軋轢があった。

分団は、地区での活動を優先すべきである有事の際はいちいち団本部の指示を待っていたら活動はできない。団本部の幹部は本部にいていいが、現場の活動は現場の判断で指揮をとるくらいの考えでやってもらいたい。

今回の活動も、各分団、各々が個々に動いている。またそうでないと活動できない。さらに、今回の大震災では、何で消防団がここまでやらなきゃいけなかったのか、という思いがある。一般の火災は直ぐに活動しなければならないが、遺体搬送などは、団がやらなければならないことかと考えさせられた。ただ悔しいという気持ちだけで活動していた。

分団長が地区の中心部の所在でなかったため、直ぐに参集できなかった。いざという時に時間がかかるため、すぐ来られる人を幹部に選ばなければならない。また、これだけ被災し、団員がバラバラになると、今後、出初式やポンプ操法等の団活動ができなくなる。また、だれがどこの仮設住宅にいるか、まだ所在がつかめていない。第6分団では部の編成が課題の一つで、今後、分団の存続のため、組織を統合する必要がある。団員には、漁業で解雇された人も何人かいる。何とか働き口を見つけているようだが、職が見つからないと、今後、団を辞める人が多くなると思われる。我々のような被災した者にとって、市や国の方針が早く決まってもらわないと、残る人も残れない。

今後の課題として、携帯電話が繋がらない場合、無線は重要である。直接、消防署とつながらなくても、経由してつながることがわかったから、今回はうまく利用できた。

また、地震が起きたら、とにかく高台に逃げる必要があるが、渋滞で津波に巻き込まれた人が多いので、車による避難はダメである。

「高いところにいる、 せっかく助かった命だ」

岩手県釜石市消防団
第6分団本部 副分団長

佐々 幸雄 (57歳)
消防団歴 35年 (漁業)



押し波よりも勢いの強い引き波

発災当日の地震発生時には、室浜漁港の防波堤の外にある作業場に居た。大きな揺れを感じ、絶対、津波が来ると思い、すぐに水門閉鎖に向かった。水門を閉鎖中に第7部の団員1名が駆けつけ、水門閉鎖を協力して行った。水門閉鎖には5分くらいかかったと思う。

その後、住民に避難を呼びかけるため、ポンプ車で広報をするように指示を出した。指示をした後、家に戻り、ヘルメットと半纏を持って屯所に行き、その時に集まっていた団員2名に、高台に避難しながら、地域住民に高台に逃げるように避難誘導するよう指示を出した。

15時05分頃、高台に避難してまもなく津波が来襲した。我々が高台に避難した時点でも、下の方の道路に座っているお年寄りもいたので、「そこでは低いのでもっと上に上げろ」と、再度指示して避難した。

津波は引き潮からはじまった。引き潮から押し波の津波が来る時間は、いつもより短かった。第1波がきたのは、15時10分前後だった。堤防の高さが3m50cmだが、堤防を越えるのに1分もかからなかった。まさか、そんな大きな津波が来るとは思わなかった。海岸の一番近くのお稲荷さんを避難場所としていたが、さらに高台の避難所へ避難した。

最初に避難した場所は、全部水に埋まった。一本松と言われる高台まで避難した人もいたが、ここも浸水し、津波に巻き込まれ亡くなった人もいたので、10m以上の波が来ていたことになる。津波で集落が流されていくのを、高台で見えていたが、涙も出ない、声も出ない、口を開けた状態で呆然と見ていた。

最初、我々は、高台よりも10m位下のところにいた。さらに上に避難する途中、70~80歳前後のお婆さんが転んで、私が左からかかえ立ち上がろうとしたら、次の引き波で巻き込まれそうになり、他の団員1名と2名で救助した。その団員がいなかったら、私も流されていただろう。押し寄せる直接の波よりも、引くときの波の方が勢いが強かった。

あの時、船出しを引きとめていたら

水門閉鎖の時は、消防団の他、集落の住民3人にも手伝ってもらった。その3人のうち2人は夫婦だったが、水門を閉め終わる前にご主人は船が心配と1人で船に乗って海に出た。今回は大きな地震だから、船を放っておいて逃げろと指示したが、それを振り切って海に出てしまった。沖に出たと思っていたが、船をいつも係留している湾の中に係留してしまい、津波に巻き込まれてしまった。それに気づいたのが、第1波の引き波がきて

からで、乗っている人が見えていた。その時、職場から帰ってきた団員3名が合流したが、船に乗っていたのは、そのうち1名の団員の父親だった。自分の目の前で団員の父親を救えなかったことに、涙を流してしまった。

また、団員1名が、一旦、高台に車で避難したが、自宅に置いてきた犬を連れ出すため車で戻り、車に犬を乗せて走り出したところで第1波にさらわれてしまった。

見えているのに救助できない

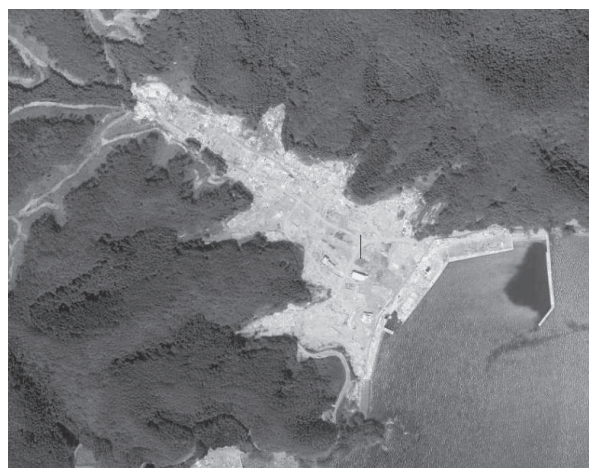
高台に避難してからは、何もできる状態ではなかった。高台から見ている間に、2人の住民が流されていくのを見たが、津波の波の中、どうすることもできなかった。また、波がきた時点で家が流れるのを団員たちと見ていて、家の見納めだという感じで、何もできない状態だった。

第1波の返し波で、高台の下の方に駐車していたポンプ積載車と住民の車の6台が、50mくらい道路に流された。

私は、集落の自治会の副会長をしているため、部落の避難者の把握を行う必要があった。山越え（1kmくらいの山）して4つの避難所を、夜までに3往復くらいして、避難者の安否の確認をして回った。全体で70人が避難していることを確認した。この時点で大槌町の火災の様子は見えた。風向きによっては、こちらまで延焼してくると心配した。

11日夕方に、1人の死亡を確認しているが、その時は道路も歩けないし、遺体収容は無理だった。そのため、遺体の場所の確認だけをして、収容はしなかった。その他に、車の中で女性が1人、家の壊れた屋根の脇に1人の遺体を見つけた。当時、集落にいた市の職員に報告すると、警察の担当だから消防団は遺体には手を付けるなどの指示があり、遺体の扱いを取りやめた。結局、4～5日間は、遺体はそのままだった。

11日19時頃、岸壁から沖合100mくらいで、大



全域が浸水した室浜漁港周辺（国土地理院）

槌町方面から屋根の上に乗って流されて来た女性が救助を求めたが、助けようにも助けられなかった。岸の方に寄せてきたため、もしかしたら助けられるかもしれないと、団員3名と下に下がったが、女性のところまでは行けなかった。団員1名が行くと言い張ったが、2次災害の心配があり、絶対行くなと抑えた。

今となっては救助活動を抑えて良かったのか、行かせた方が良かったのか、迷うところである。人の命を預かっていると、状況判断が重要となるが、どうにもできない状況もある。もう、暗くて顔も見えないし、波でさらわれてだんだん遠くなり、声が聞こえた方向に「頑張れよ」と声かけたが、どうにもならなかった。

発災当日の11日中は、団の活動ができる状況ではなかった。常に津波の動きがあり、余震のある中、人を探す状態ではなかった。2次災害の危険から、団員には、「高いところに居ろ、せっかく助かった命だ」と、下には行かないように指示を出した。23時に大きな余震があった時は、堤防は壊れて津波の防ぎようがないため、直ぐには活動せず、明るくなるのを待つように指示した。

自衛隊のヘリによる搬送を依頼

12日の朝、自衛隊のヘリが1機降り来て、地域の地形に詳しい人1名の協力を希望したので、機能別団員を同乗させた。また、市の災害対策本部

より、自衛隊の方が対応が早いので、もし避難する場合は、直接、自衛隊に知らせてくれとの話があった。

無線も何もないので、ヘリが通ったら何かで合図してくれと指示をもらった。13日の朝に自衛隊のヘリが来たので手を振ったらすぐ降りてきたので、「病人もいるし、山火事も来ているので避難させてくれ」と頼んだ。

降りてきたヘリは1機だったが、その後、すぐ応援の2機が来た。計3機の自衛隊ヘリで住民の救助を行った。1回目は病人、2回目は女性、高齢者を運んだ。

ほとんどの遺体は瓦礫の下だったため、瓦礫の上から発見できる状態ではなかった。遺体捜索のため、自衛隊と警察は、どのように津波（潮）が流れたかの情報をほしがっていた。我々は最初から津波の様子を見ていたので説明したが、結局、遺体は見つけれなかった。

瓦礫撤去が本格化したのは、重機が入ってからで、11日、12日は捜索しても、人は見つからなかった。12日は山から1時間かけて声をかけながら降りてきて捜索を行った。14日に、自衛隊が山で焼死体を見つけた。おそらく11日に津波で山に避難し、夜寒かったので、濡れたまま寒さで冷えて亡くなり、その後、山火事に巻き込まれたのではないと思われる。水死体は、時間経過とともに表情が変わり、3、4日経つと身元を確認するのが難しかった。私の親戚も3月15日に遺体が上がっていたが、その場では分からずDNA鑑定でわかったのが5月末だった。

この日になって、大槌町の方からの煙がけっこう見えていたので、絶対こちらに延焼して来ると思った。このため、観音神社に避難していた40人を安全な別の避難所に移した。70歳～80歳の高齢者、寝たきりの人、車椅子の人などがいたが、山道を背負ったり、ロープで引っ張ったり、担架を作ったりし、1時間かけて片岸町に避難させた。

12日夕方に、大槌町からの火が山越えて近づいてきた。片岸町側からの県道は崩落し、道幅が2m位しか空いておらず、軽自動車1台くらいしか



山を越えてたどり着いた片岸町（国土地理院）

通れない。その間を軽トラックでどうにか、避難させたあと、片岸町側から道路の復旧、啓開をしていた。

13日は、一日中、道路に流された車の移動、屋根の取り壊しをして、道路を通れる状態にした。また、この時に、住民の安否確認をするとともに、若い団員には、流された瓦礫中に食糧を探しにいかせている。

12日に安否確認をしているとき、避難している人の中に、ものすごいびきをかいて寝ている人がいたため、脳溢血の可能性があるので、救急要請を行った。朝10時前に要請を出して、収容に来ると返事がきたのは15時過ぎだった。その後、車が通る所まで、団員5、6名が戸板に乗せ、布団をかけて人手で運んだが、結局、死亡したようだ。

長期に避難する施設が無いので、残った住民をどこかに避難させるように市に要望した。それを受け、自衛隊のヘリ3機で、6、7回に分けて、ピストン輸送をした。その後、団員を2班に分けて、瓦礫撤去（道路啓開）と遺体捜索を行っている。11日に発見した女性の遺体収容を指示し、団員4名で収容を行おうとしたが、山から火が延焼してきていて、その火災の煙で活動はできないと断念した。

また、13日午後に宮古での大きな引き波観測情報があり、大きい津波が来るとの話があったため、住民全員を避難させ、団員10名も全員避難した。

地震後3日目に、捜索前に発見した遺体4体、

搜索活動で新たに発見した6体の計10体の遺体を収容した。自衛隊にも協力してもらい、部落の瓦礫を撤去して搜索したが、遺体の発見はできなかった。その後、団員は集落の片づけ、道路の整備を行った。

重機が来ないと搜索もできない

結局、集落は20日間以上孤立していた。道路が復旧しないことには重機も入らないので、搜索活動が遅れることから、市、県にはとにかく道路だけでも開けてくれと要請した。瓦礫の下にきっと遺体があるだろうから、遺体搜索しなければいけないと、何回も電話してもらい、早期に道路の開通を求めた。

14日朝の時点で、大槌町に住民のほぼ全員を避難させた。大槌町方面から火が来ているので心配だったので、その後、団員5名で集落に戻ってみると、山を越えて集落の半分が燃えていた。津波に流された瓦礫の所までは火はきていないが、山側は全部燃えていて、12日に避難していた民宿の近くまで火が来ていた。

13日夜には、民宿に3人の住民が残っていたが、消防団員5名で、幅2mしかない道路にポンプを配置して、消火活動を行った。水利は海からとり、午前10時ころから水を家に向け始めた。既に2つめの山が燃えており、いつでも水をかけられる状態にしていた。すると、今までの北風が南風に変わった。消火をするため、水を上げろと指示でしたが、水が上がらず、水がきても3分くらいでなくなった。そのため、ポンプの位置を変えて消火を行い、この民宿を守ることができ、鎮火することができた。

重機が無いと本格的な活動ができないため、17日には、私自身が第6分団の本部に移った。第6分団第5部の屯所に行き、本部長と合流した。分団長とは連絡つかなかったので、私がほとんど第6分団の指示を出した。第6分団は、津波が収まった後、瓦礫撤去が主な活動となっていたが、14



片岸町室浜に明治29年の明治三陸地震の際に建てられた海嘯記念碑（左）と昭和8年の昭和三陸大地震の際に建てられた津波記念碑（右）。津波記念碑には、当時の石黒英彦岩手県知事の書で「大地震の後には津波が来る」と刻まれている。

日には山林火災対応が主になり、15、16日と続いていた。釜石の中心部と電話が通じるようになっても、第6分団第5部地区は一般電話も携帯電話も通じなかった。

そのため、何か緊急の要請があった場合に備えて、ポンプ車の消防無線が頼りだったので、屯所に待機していた。無線を守らなければならないため、私と本部長は屯所に2か月くらい避難していたが、回線が復旧するまでは、無線のスイッチは入れっぱなしだった。

私がいる室浜地区は人の力で動かせる瓦礫がなく、重機がなければ何もできない状況だった。自衛隊が瓦礫処理を行うため、重機が入った時は団員が立ち会った。瓦礫撤去の際は、我々は見ていることしかできず、遺体が出た時に確認するくらいだった。

4台のポンプ中継で火災への対応

山火事の対応にあたって、水利は海水を用いた。14日は、第5分団からも応援があり、第5分団が4台のポンプ中継で水利を確保した。海水を使用した場合は、洗浄のために3、4時間の低速運転をしなければならない。

また、帰任直前の大分県の緊急消防援助隊が山火事に対応するために、川から水利を確保して消

火・鎮火した。ポンプ車4台の中継で水路を確保していたが、ホースの延長がものすごく早かった。その日の夜、また火災が発生し、翌日ヘリを頼み、水を十数回散布して消火をしている。午後、また煙が発生し、消火作業を開始した。松林の火災で、消防署と第6分団20名くらいで消火を行った。山火事は大槌町側から発生し、5日間続いた。14日夜、一旦、ここまで来ないだろうと撤収していたが、撤収した後に、山火事が広がり、一晩で1軒燃えてしまった。

避難の状況

市からの避難指示・勧告の放送を聞いた記憶がない。箱崎地区の人の話だと、市の防災行政無線から「3m前後の津波」という放送があったという。前々日の3月9日の地震では、津波注意報が出ているが、津波は1m20cmくらいだった。3mと放送されたなら、この海岸地区では3mの波で越すところはないため、大丈夫と思って避難しない人も多かったかもしれない。また、明治三陸津波、昭和三陸津波の頃は、この地区には防波堤がなかった。今回の津波の規模は、高さから言うと昭和三陸津波の3倍くらいである。

室浜地区には、昭和三陸津波で津波がここまで来たという記念碑があるが、これをはるかに超えている。津波記念碑にも「地震が来たら津波が来ると思え」と書かれている。そのため、むしろ若い者より年配の人の方が避難の意識がある。

さらに、一旦避難して、家に忘れ物を取りに行った人の被害が一番大きかったようだ。逃げる場合は、横に逃げるのではなく、高いところに逃げなければいけない。今回も左に行くか、右に行くかの一瞬の判断の違いが生死をわけている。津波の場合は1mでも高いところに逃げた方がいい。

車椅子で逃げた人が3人くらいいた。機能別団員が3名いて、車椅子の人の避難の介助をしている。また、地区内に偶然、デイサービスで釜石中心部の病院から看護師が2人来ていて、寝たきり



沿岸部の道路の多くが通行不能となり、陸の孤島と化した地域もある
(岩手県消防協会提供)

の老人のために担架を作ったり、背負ったりして避難させ、また、避難した人が水ですっかり濡れてしまったので、避難所で着替えをさせた。この2人の看護師に手当してもらったこともあり、今も元気である。また、大槌町の中学生在が2人釣りにきており、避難所に避難させた。

釜石東中学校の津波教育は「津波てんでんこ」として進んでいる。自分の命は自分で守ろうと、子どもの意識は高い。しかし、その子の親が大丈夫だと思ってしまっており、特に若い人にそういう人が多かった。ただ、平日で自宅に子どもたちもいなかったし、昼間で明るく、津波が襲ってくる状況が見えたので逃げられたが、夜間だとさらに被害は大きくなっていったかもしれない。

なお、鶴住居地区の防災センターで60人近く亡くなっているが、鶴住居地区は海が直接見えないため、どのくらいの波が来ているのかわからず、避難が遅れたのではないかと推測される。

室浜地区における分団の状況

地区の団員は17名だが、発災時に地元に住居したのは、自分を含めて2名だった。津波の前には、大槌町から3名、吉里吉里から1名、釜石の小佐野から1名の計5名が戻ってきた。それぞれ、この地震の揺れで、これは絶対津波が来るとの確信があり、帰ってきている。夕方までには、道路が通れないため、山を越えて、7名位が参集した。団

員は、仕事を持っていて地元にはいないが、普段から大きい地震があると水門を閉めるために戻ってくる。第7部の部長は出張先の仙台で被災し、会社の車で乗り継ぎし、3日目に戻ってきている。他にも、その日に戻ってこられなくても、2、3日後に戻ってきている。なお、津波の前に戻ってきた団員は、屯所に行く時点で津波に巻き込まれ、車を流された人もいた。また、ポンプ車に乗ろうとして屯所の近くで流された人もいる。第6部で部長1名と団員2名が亡くなっている。津波が来るのがわかっても、住民を避難させたり、ポンプ車を移動させようとしていたようだ。

海の近くの分団でポンプ車が残ったのは我々だけで、他に残っているのは内陸の第1部のポンプ車だけだった。他の部は、避難している間に津波に襲われてポンプ車を流失している。そのうち、第8部は一旦水門を閉め、ポンプ車を車庫に納めたあと、流失している。屯所も第5部以外は流失もしくは破損の被害にあった。この後々の活動で、ポンプ車不足の対応に苦慮している。

なお、自分の妻は仕事先で被災し、4日間連絡取れず、心配だった。4日目に第2部の部長から、妻の安全を教えてもらい安心したが、会ったのは1週間後だった。立場上、たとえ自分の家族が心配であっても、それぞれの現場で対応していかなければならなかった。

通信手段の確保が必要

連絡は、携帯電話がだめだったので、消防無線1本が頼りだった。集落からの連絡、安否の確認、食糧の要望などで、消防本部とはけっこう連絡をとっていた。そのため、衛星電話があればよかったと思う。また、第7部内は携帯無線機で連絡をとりあっていたが、携帯無線機はあまり遠くに飛ばず、分団内の各部間の連絡はつながらない。そのため、横のつながりも充実させるべきで、縦横無尽な通信網が必要である。

また、今はインターネットでしか見られないと

いう情報が多いが、被災するとそれが見られないので、それに替わる伝達手段を確立しないと皆に伝わらない。避難所においても、テレビやラジオで「こういう情報はインターネットで」というのが、避難所ではそれが見られない。広報誌なり、町内会宛のプリントされたものでも良いから手段の確保が必要である。特に、声で聞くより、書いた物を見るのが確実で、取っておけることも重要である。

支援体制を考えてもらいたい

市、常設消防、消防団の指示の仕方を明確にする必要がある。市の災害対策本部には、消防も消防団も入っているが、直接の指示の仕方がしっくりしていなかった。実際に動くのは地域住民でもある消防団である。また、我々は何もかも流され、何もなかった。着る物や履く物もなく、同じ物を1週間から10日ずっと着ていたので、支援体制も考えてもらいたい。

さらに、装備の充実として、ポンプ車、各種機器、無線等の整備が必要であるが、今回の津波で屯所がつぶれて、団員が集まる場所がなくなっており、また、個人装備も無くなっているため、それらの整備も必要である。

地震後、津波の夢は見ないが、10日間のうち同じ夢を5、6回見ることもあり、自分では大丈夫と思うが、こういう点で心のケアを必要としているのかなと思うことがある。団員の中には、親、兄弟、知人を亡くした者や家族の遺体が見つからない者もあり、そういう点での団員に対する心のケアは必要になるだろう。

水門閉鎖は地元企業に 委託してはどうか

岩手県大船渡市消防団
第3分団 分団長

佐々木 啓一 (52才)
消防団歴 34年 (会社員)



大船渡市の概要と被害状況

大船渡市は、岩手県の南東部の太平洋岸に位置し、陸前高田市、住田町、釜石市に隣接する。市の総面積は323.30km²、人口は3万9,548人（平成24年1月31日現在）、世帯数は1万4,506世帯（平成24年1月31日現在）である。大船渡市の主要な産業の一つは水産業であり、市の沖合は、「世界三大漁場」ともいわれる北西太平洋海域（三陸漁場）となっている。大船渡港は、岩手県内の最大かつ最重要港湾であり、岩手県内初の外国定期航路として韓国の釜山とも結ばれている。また、市内各地に石灰石鉱山があり、大船渡湾奥には太平洋セメント(株)大船渡工場がある。

3月11日の地震では、大船渡市大船渡町で6弱、猪川町で6弱、盛町で5弱（3月30日気象庁発表）を観測した。同市の人的被害は死者340人、行方不明者84人、負傷者不明、住家被害数は、全壊3,629棟、半壊不明となっている。なお、昭和35年のチリ地震津波では国内最大の被災地となった。

大船渡市消防団は、12分団51部から構成され、



被災状況

団員数は1,049名（平成24年2月29日現在）である。このうち、女性団員が1名いる他、大船渡市役所職員等の団員が126名いる（平成24年2月29日現在）。また、ポンプ車か小型ポンプ付積載車が計60台配備されている。

津波の第2波が引くまで何もできない

地震発生時は、職場の冷蔵会社の工場にいた。自宅から5kmぐらいのところであり、管轄の分団の担当エリアではない。尋常でない地震の揺れで、津波は必ずくるだろうと思ったが、せいぜい床上浸水くらいと思った。あれほど大きい津波がくることは想定できなかった。

職場の人には「津波が来るから逃げなさい」と言って、私は屯所に向かった。職場を出て、海岸沿いの道路を行き、一旦、自宅に寄って自分の家族の安否を確認し、それから第3分団第2部の屯所に駆けつけた。途中の国道は渋滞していたが、どうにか渋滞を抜けてたどり着いた。

津波が来るまでは、地震後20分～25分くらいあった。私が屯所に着く前に、「津波が来る恐れがありますので避難してください。各分団は水門閉鎖をしてください」という市の広報を聞いて、水門閉鎖に向かっていた団員がいた。水門閉鎖後、団員はポンプ車を避難させた。屯所は海岸のそばで、浸水予想地域にあったので、ポンプ車は線路

より上の方に待機させることに決めていたが、現場の判断で、さらに安全な高いところに避難していた。一応、団本部とは無線でやりとりがあったが、結局、対応は現場の判断となった。なお、第3分団第1部は大船渡漁港の近くにあり、第3分団第3部の屯所は魚市場の近くにある。各部との連絡のやりとりはできており、また、国道が一応通れたので、分団内の行き来はできていた。

マニュアルでは、地震発生時に、避難誘導・配置と避難広報を行うようになっており、海岸通りの道路沿いに人員を配置し、下から来る人たちを「上がって下さい」と避難誘導する。チリ地震津波の浸水ラインがあるので、必ずそれより上に配置するようになっている。各集落の高台に避難場所を設置しているのでそちらに移動するように呼びかけている。これに沿って、毎年、市が訓練を行っており、今回もそのとおりにやった。ただ、一旦潮が引いた時点で下に残っている人がいないか、確認に行った団員もいたようだ。

住民を逃がすのに大変だった状況もあったようだ。目の前まで水が来ているのに避難しない住民がおり、その住民を避難させようと団員が水の中に入って無理矢理引っぱって来たとのことだ。その人は放心状態だったのかもしれない。また、「避難してください」と言うと、「はいはい」と返事しているが来なかった人もいる。ここまでは津波は来ないだろうと思っていたようだ。また、もともと動けない人もいた。自宅で酸素吸入していて逃げられず、潮が引いてから「そこにいるから」という話で、家に捜索に行ったがもう亡くなっていた。第3分団の管内で逃げ遅れて亡くなった人は3人ぐらいである。この地域は、チリ地震津波のときに浸水している。チリ地震津波なのか、明治・昭和三陸地震なのか、想定はわからないが、水位がここまで来たという標識があって、避難誘導の標識もある。津波が来るとわかっていて高台に逃げた人が多かったが、チリ地震津波の想定を越える津波だった。

各部のポンプ車の待機場所の想定を越える津波が来たので、もっと高いところに移って状況を見



被災状況

ていた。津波が来て、各部に状況を報告するように指示した。間もなく、かなりひどい状況だとの報告があったが、浸水していたこともあり、第2波が収まるまでは何もできない状態だった。

水利不足の中での消火活動

津波が収まってから各部に指示し、取り残された人の捜索を開始した。また津波が来ると思われることから、危険のないように確認しながら捜索活動を行っていた。そうする中、第3分団2部の屯所の近くの人たちから、どこどこに誰が取り残されたという情報があり、その場所に行って被災した人を搬送したが、ほとんど亡くなっていた。数人は、息があったので、消防署に救急車を要請し、搬送した。亡くなった方は、一旦、捜索で見つかった場所の近くに集めたが、その後は安置所へ搬送した。このような活動が、夕方暗くなるまで続いた。

当日夕方、浸水地域の中で火災が発生したが、現場まではかなり距離があり、断水もしており、貯水槽の水が限られていることから、当初は消火活動を行わず、火元が近づいて来たら、延焼を食い止めるために、消火活動するように決めていた。そのうち、夜中になって火がこちらに来たので、消火活動を始めた。消火活動の応援に、団本部から山手分団に来てもらった。なお、水利が不足しているため、極力少ない水で、鎮火ではなく、延焼を食い止める程度の消火活動を行った。そのため、火はかなり長い時間くすぶっていた。水利は、あたりから現場近くの貯水槽に水を送って、そこに水を貯めて使った。翌日の夜中3時

らいには火はおさまっていたので、延焼しないか見張るため数名を待機させていた。自然鎮火したのは2日後ぐらいだった。

団活動のほとんどが搜索活動となる

本格的な搜索は次の日から始まった。住民から、あそこに誰かいたはずだとかいう情報があって、搜索した。結局、2人発見したが、どちらも既に亡くなっていたので、担架で運んだ。また、1人生存者がいたはずだが、その後亡くなったということだった。第3分団の地域では高い建物がないので、ビルや屋根に取り残された人はいなかった。隣の第2分団では、スーパーとかホテルに避難した人が取り残されていた。なお、そういう人の救助は消防団ではなく、消防署や自衛隊等が行ったと思う。当初は瓦礫がすごくて、現場までは消防団は行けなかったため、取り残された人がどれぐらいいるか把握できなかった。

避難途中にケガ人がいたので、消防署へ救急要請をした。また、停電していたので、酸素吸引をしなければならぬ人が屯所に発電機を貸して欲しいと来たこともあり、2、3日後容態がひどくなって、屯所に来て救急車を呼んだ。また、ノイローゼ気味の人がいて、遺書を残して家出したというので、搜索活動したが、その後、無事戻ってきた。団員が直接、けが人を病院に運んだりしたことはなかったと思う。

翌朝から、自衛隊と一緒に搜索活動を行ったが、見つかったのは1人だけだった。第3分団管内では、ほとんどの住民が逃げて、亡くなった人は少なかった。地震直後は、線路より下の人たちはほとんど逃げたが、上の人たちは逃げるのを渋っていた。その後、津波が来たため、それから逃げ始めたようだが、どうにか間に合った。

分団内部との連絡は、トランシーバー（パーソナル無線）で行っており、各部に2、3台ある。本部とは消防無線（各分団に1機）で行った。なお、携帯電話は通じなかった。本部は最初の頃、

人がいなかったのでやりとりせず、消防署が対応した。津波到達前に本部や消防署と無線で連絡がとれ、分団本部の設置時間等の状況報告をした。その後の津波が来ている間は、手をつけられない状況で、連絡はとっていない。また、他の分団とは連絡をとらなかった。

自衛隊の活動期間は、3日目から1か月ぐらいは活動していた。搜索活動を一旦ここでやめませうという日があって、そこまで一緒に活動した。

消防団としての活動は、ほとんどが搜索活動で、他の活動はやれる状況ではなかった。遺体搬送はあまりなかった。搜索活動中に遺体を発見した場合は警察を呼び、まかせるようになっていた。その場所に置いておくのが難しければ、担架等で移動した。これ以外の活動としては、電気が回復するまでの期間、ポンプ車で市中を広報して回った。

第3分団が落ち着いた段階で第2分団管内にも応援に何回か行った。分団本部が下船渡の公民館の脇にあって、そこから食事等を何日間かにわたって提供してもらった。燃料は、発電機の燃料も含めて不足はしなかった。

被災後の分団と自宅の状況

地震当日は、市役所職員や仕事で大船渡市外にいた団員以外はほとんど参集し、活動に支障がない程度には集まっていた。地震後、第3分団第1部は屯所と地域の公民館がなくなったので、仮設のテントで夜間は待機をしていたが、結構寒い思いをさせたと思う。第3部も同じような状況で、夜は公民館（プレハブの倉庫のような所）に待機していた。第2部は屯所で過ごし、家がある人は帰った。

団員に死傷者はおらず、団員の家族も被害はなかった。ただ、自家用車は流されている。ポンプ車は高台に移動していて大丈夫だったが、屯所の中にある機材はだめになった。被災した地域の団員数は20名くらいだが、各団員の親戚が近くについて、夜は家に戻れたので、帰れるところが無く

なってしまった団員はいない。なお、屯所にずっと詰めていたのは幹部だけである。疲労で体を壊したりする団員はいなかったが、捜索活動中に軽いケガをした団員は何名かいた。

被災した団員の中には、地域と離れた仮設住宅に入っている者が若干いる。また、復旧が進むにつれて、団員が職場に復帰しなければならなくなり、消防団活動は難しい状況になっていった。

自宅は、津波の浸水地域だったので流されてしまった。そのとき在宅だったのは、母だけだったが、避難していて無事であった。娘は高校生で、高校から帰るなという指示があったようだ。妻は、市内綾里の小学校の養護教諭なので、子どもたちを避難させ、子どもと一緒に避難所へ避難したようだ。妻や娘の安否確認ができたのは、4、5日ぐらいたってからだった。2人は、その後、私の兄の家に避難していて、その兄が屯所に来てくれて安否を伝えてくれた。母は、一旦高台に逃げ、自分の家が流されるのを見た後、親戚の家に行った。

水門閉鎖は地元企業に委託してはどうか

問題点としては、水門閉鎖が危険なので、自動閉鎖、できれば遠隔操作で閉まるようにして欲しい。水門は手動と電動のところがあったが、今回の地震では停電で電動では水門は閉じられず、手で閉めた。また、水門閉鎖は、消防団がやるのではなく、近くの地元の企業に委託するという手もある。団員は職場から向かうわけで、時間がかかるが、震源地によっては、10分くらいで津波がくることもあるし、平日の日中は団員がいらない。

また、その時の気候によるが、屯所に毛布や布団がないので、これらを準備した方がいいのではないか。また、屯所に食糧は備蓄しておらず、今回は自主防災の炊き出しのお世話になっている。さらに、燃料等の確保も重要である。また、団員の充実が一番大切だが、勧誘・確保には苦勞している。一般の会社では、団員が緊急時に出て来ら



停電により自動閉鎖できなかった水門もあった。状況ではない。協力会社への表彰制度などはあるが、なかなか理解してもらえない現状がある。また、消防団は、消防・防災の活動が主だが、行事等にかり出されたり、警備などの活動も結構あり、そういった活動の数がもう少し少なければ集まりやすいのではと思われる。工夫はしているのだが、若い人が入りにくい現状であるが、一方で、30歳を越えてからのUターン組などは、積極的に参加してきている。

装備として、無線がかなり古いものなので、バッテリーが充電してももたなくなっていた。これでは使えないので、震災後に15台ほど購入した。たまたま発電機があったので、充電はできた。また、資機材としては、緊急のテントなどあるといい。屯所が津波危険地区にあるため使えず、夜は仮設テントを建てて待機していた。暖房等の設備がないので、近くの人たちがストーブ等を用意してくれた。そういう状況になったときに団本部や消防署で暖房等の設備を用意しておけば、各分団に配備できるのではないか。また、長靴や手袋が津波の捜索活動には不適だった、津波浸水における捜索活動を前提にした被服関係は装備していいと思う。

なお、去年のチリ地震津波の時、団は計画通りの対応しており、津波警報が解除になるまで待機していた。また、3月9日の対応も同じような状況だった。津波注意報の段階で分団本部設置し、各分団は水門を閉鎖、各部は避難誘導の場所に待機している。これまで、かなり出勤を繰り返しており、最近は解除するまでの時間が短くなっていた。

住民の避難に対する意識は、今回のことで高まったと思う。その後、何回か強い地震があったが、その時は自ら避難していた。

避難についての住民意識を変える ソフト面の対策が必要

岩手県大船渡市消防団
第10分団 分団長

千田 岳明 (49才)
消防団歴 26年 (公務員)



職場から戻れず市役所で過ごした

市役所で勤務している最中に大震災が発生、直後にはすぐにでも綾里に戻らなければならないという思いだった。帰る途中の道路等が、津波の浸水を受ける可能性が非常に高いことは全く考えていなかった。

市役所前の交差点の信号が停電のため渋滞していて、駐車場から道路に出るのに20分～30分近くかかったと思う。道路も既にひどく渋滞しており、近道を行こうとしたところ、車の目前を瓦礫が流れて行くのが見えたため、市民文化会館に一旦避難し市役所に戻った。

あと1分戻るのが遅れていたら津波に巻き込まれていた。

地震直後には停電し、携帯電話による連絡もとれなくなったため、第10分団（綾里地区）の指揮を誰がとっているのか、誰が参集できているのかも把握できなかった。

市役所で待機し、屋上から盛地区に押し寄せる津波の様子を見ていたが、ここまで津波が来るなら綾里のほとんどはだめだなと感じた。

綾里小学校も若干低い所にあるので、そこまで来ているかどうか、といった思いだった。また第10分団がどういう活動をしているのかわからなかったため、祈るしかなかった。

車で綾里には行けないので、市役所に待機する



綾里の海岸部（国土地理院）

こととなったが、夜半、発電機でテレビがついている部署に行ったところ、気仙沼の惨状などを放送しており、これでは綾里もダメだなと思った。

また、ラジオでは、綾里中学校の生徒が消息不明という情報が流れており、しばらくして無事だと確認はできたが、その時には、これはとんでもない事態になっていると思った。他の市役所職員と、どうやって綾里に戻れるか相談していた。

綾里地区への移動とその後の行動

夜中の2時半頃、越喜来の方を迂回して、綾里に帰れそうだという情報が入った。

綾里に家がある市役所職員と、甫嶺経由で綾里に向かったところ、三陸鉄道甫嶺駅の裏まで津波が押し寄せており、道路が決壊していた。

綾里に着いたのは朝4時頃だったと思うが、自

宅の1軒先まで流されており、また自宅も床上浸水していたが、幸いにも家族は綾里中学校の体育館に避難しており無事だった。

綾里地区では他に、野形と田浜の2、3箇所に住民が避難していた。

朝5時半頃、分団本部が設置されたという市の出先である地域振興出張所・綾姫ホールに着くと、綾里出身の副団長が指揮をしており、被害状況や行方不明者の確認等の指示を行っていた。また、市議会議員や婦人会の方がすでに農家から米を分けてもらい、炊き出しを始めていた。

3月11日の夕方から、集落の有志や分団で、住民の安否確認を行っていて、12日の朝には行方不明者の氏名がほぼ確定していたように記憶している。

行方不明者については、不明となった場所を推定し、消防団員が人海戦術で捜索を行った。しかし、内陸の奥まで津波が来ており、瓦礫をどかしながら捜すしかなかった。

捜索中の団員のケガのことは頭になかったが、釘で足を踏み抜いてしまった団員が2名ほどいた。

応援隊についてであるが、隣の住田町の消防団が、翌日から応援にきていただき、また綾里の山林で仕事をしてきた住田町の林業会社が、森林伐採用の重機3台を提供してくれた。

最初は、団員だけで捜索活動を行っていたが、3月12日か13日の朝から自衛隊39普通科連隊が重機2台と50人～60人で捜索活動を開始した。また、その後も、秋田県警の救助隊が応援に入り、壊れた家の中から何人か遺体を発見していただいた。

住田町の林業会社には、長期間、重機や人を提供してもらい、この応援がなければ消防団の作業はかなり遅れたのではないかと考えている。心から感謝したい。さらには綾里地区内の土建業者からも重機やダンプ等の提供をしていただき、道路を確保しながら瓦礫を撤去し、行方不明者の捜索を行った。

結局、綾里では十数人の遺体を消防団が発見、



綾里の内陸部（国土地理院）

収容した。

綾里の行方不明者は大船渡市街地に比べて少なかったが、行方不明の方は、海に流された可能性が高く、捜しだすことはできなかった。

捜索に一区切りがついたのは、3月29、30日頃だったと思うが、瓦礫撤去には1か月以上かかった。

5月の中旬頃と記憶しているが、消防団員に対して会社から仕事に来てくれという呼び出しが増加してきた。瓦礫の撤去も進んでいた頃であり、また仕事あつての消防団員であることから、仕事に行ける団員について極力勤務させるように配慮した。10分団の団員は140名ほどいるが、その頃から瓦礫撤去等に参加する団員は各部で2、3名とするように指示した。

燃料の調達、婦人会による炊き出し

地震当日の夜は気温が下がり、避難施設では寒さを訴える人が多かった。しかし燃料がないということで、団員が大船渡市街地に取りに行くことになったが、越喜来経由なら行けるとのことで、消防車両を使用して燃料を調達し、避難所等の暖房に使用した。

その後は、1台の消防車を灯油・軽油の運搬専用と決め、大船渡市街地のガソリンスタンドへ午前と午後に燃料を取りに行くこととした。

炊き出しは婦人会の方々に行っていただき、避難所と消防団などに毎日三食を配っていただいた。婦人会の方々の協力がなければ、捜索活動も

出来なかったと思う。本当に頭の下がる思いであった。市役所職員、婦人会、自治会、消防団員が一緒になり、結果的にはうまく分業したと思う。

3月12日の朝には既に婦人会の方により炊き出しを行い、避難所、団員に食事を配っている。また支援物資等の受入れ・搬送は市役所職員が主に行っていた。

震災直後から綾里は停電し、断水の状況だった。3月16日くらいまで団本部とは連絡がとれず、第10分団だけの判断で対応した。各部との連絡はポンプ車に積載されている無線で行ったが、それも難しかったので、朝・昼・夕方3回、各部長が集まって調整し連絡事項等の確認を行った。

特に、夕方には、その日の結果報告、翌日の捜索活動等について各部長と調整し、翌朝から作業に取りかかる体制とした。これには消防団員の他に、綾里の建設業者にも入ってもらって、地区割り等を調整した。綾里地区の建設業者は、積極的にトラックやダンプなどを提供してくれた。

住民のけが人の手当て等については、分団では対応していない。綾里地区に消防署の分遣所があり、救急車と救命救急士も常駐していたので、具合が悪くなった人は救命救急士が一旦話を聞いた後、病院へ搬送していた。

なお、地区内には診療所があったが、医師が日替わりで診察する体制となっており、震災時には医師は不在であった。医師が来られるようになったのは3日後くらいである。

かなりの人数の高齢者や喘息の子どもが、具合が悪くなったりすることがあったが、消防署員は少ない人数で懸命に対応していた。

各組織との連携が徐々に機能し

私と副分団長は、震災直後は仕事のため不在だったが、副団長がちょうど綾里にいたことから、初期の対応がうまくいった。さらに、市議会議員、消防署職員、消防団員が一緒になって行方不明者、避難者の確認をしたこともよかった。地域

のつながりがある地域なので、住民がどこに避難したのか、また不明者の名前等を把握するのは比較的容易だった。

従来から分団としては、水門を閉鎖しその後は高台へ避難誘導、海面監視するように決めていた。しかし、ここまでは来ないだろうという屯所の1m程下まで津波が来たので、そこにいた団員は逃げたという話は聞いた。想像したこともない津波だったようだ。

団員は、大船渡市街地や釜石に働きに行っている人がかなりいるため、当日の日中いなかった団員も多い。しかし漁業に従事している団員は若い人が多く、地元にいる時間が長いことから水門の閉鎖はスムーズにできた。

災害時は地区ごとに、市役所の地区本部を立ち上げるようになっており、消防団は、地区本部とも情報連絡を行った。震災直後は捜索が主だったが、3、4日経ってから避難の状況、炊き出しの状況、行方不明者の状況等、相互の情報を共有した。

地区本部と消防署、消防団、市役所、警察、地域の自主防災組織との連携は、徐々に有効に機能し始め、特に自主防災組織には遺体安置所を提供してもらったり、具合が悪くなった人への対応などで支えていただいた。

綾里の消防団員で亡くなった人はいなかったが、屯所は2箇所流された。屯所が流されているため、現在は仮設の車庫に消防車両を置いている。

なお、市役所職員の消防団員は火災でも災害でも消防団活動を優先することになっており、若い職員は、ほぼ100%近く消防団に所属している。

明治・昭和大津波の教訓が生きている

今回の地震に関して、綾里地区の住民は積極的に避難していると思うが、亡くなられた方の何人かは、普通に逃げていれば助かったのではと思う人もいた。2日前の地震で結果的に何10cmという

津波が確認されただけだったため、ここまでは津波は来ないのではという油断があったのではないかと思う。

亡くなられた人は高齢者だけでなく、若い人もいた。何か物を取りに行った矢先に津波に巻き込まれた人、家族で家にいて亡くなった人、車に乗っていて亡くなった人など様々である。

今回の揺れは非常に大きかったため、ほとんどの住民は誘導する前には避難していた。地震直後は市の防災行政無線は生きており、大船渡市街地ではバッテリーがなくなるまで、避難指示・誘導などの放送は流していた。しかし、綾里地区にまで防災行政無線が継続して届いていたかは不明である。

高齢者を除いて、津波を知らない世代がほとんどになってきている。そのため、綾里小学校は津波教育を積極的に行い、学習発表会で津波を題材にした劇を演じている。津波に対しての意識や啓発は、高い地区であると思う。

綾里地区は大船渡市の他の沿岸分団に比べれば人的被害は少ない方であったが、家屋はかなり被害を受けた。

しかし昭和8年の三陸地震津波以後に、山を削って高台に家を造ったところは今回被害を受けていない。また、高台に通じる階段を造って、そこに逃げられるようにしていた。

「津波てんでんこ」の意識が根底にあったことも確かだと思う。明治・昭和の大津波の教訓が生きていると思った。

住民の意識を変えるソフト面の対策が必要

震災前に避難場所、避難路は事前に決めていたが、住民は今回さらに奥地の高台に逃げている。

浸水した地域を通らない避難路・避難場所を新たに設定して、避難訓練を平成23年5月に実施した。

10分団としての今後の活動の目標は、家庭の中でそれぞれに避難場所を話し合ってもらうこと、



被災状況（大船渡市内）

高齢者の世帯や一人暮らし世帯の避難方法、仮設住宅での火災発生時の消火体制などについて確認・検討を行うこととしている。とにかく逃げる場所を知ること、知らせることが肝要である。

今後の検討課題として、水門閉鎖の後の避難誘導時に、津波に巻き込まれて殉職した団員がいることから、水門閉鎖は絶対に遠隔操作で行う必要がある。

また、消防団員であっても、高台に避難するということを徹底させる必要がある。巻き添えになって消防団員が危険に晒されることは、あってはならない。

今後水門閉鎖のあり方など、どのように決定されていくのかは分からないが、団員の負担軽減について徹底した検証と検討が必要である。

また、消防団が住民を避難させるためのソフト面の対策を充実させることが重要だ。防潮堤を10m高くしても、20mの津波がくれば同じ結果になる。

今は防潮堤の水門は壊れたままの状態であり、分団として現在は避難誘導に主眼を置いている。建物は壊れても、人を助けるためにどのようにすることがベストなのか、課題である。

綾里では昔から、津波が来たら高台にばらばらでも逃げるといふ「津波てんでんこ」という言い伝えがある。家族などがお互いを信頼し、それぞれに逃げて生き延びようというもの。

今後、住民と消防署・消防団が一緒になり、どこにどのように逃げるのかといった避難方法、そして生きのびるための方策について、十分な検討が必要である。

海に接していない高田分団が 津波被災地への道を切り開く

岩手県陸前高田市消防団

副団長

渡邊 克己 (54歳)

消防団歴 31年 (林業)



陸前高田市の概要と被害状況

陸前高田市は、岩手県の南東部の太平洋岸に位置する。東は大船渡市、西は一関市、南は宮城県気仙沼市、北は住田町に接している。市の総面積は232.29km²（平成22年10月1日現在の「全国都道府県市区町村別面積調べ」による）、人口は2万4,246人（平成23年3月11日現在、住基人口）、世帯数は8,068世帯（平成23年1月31日現在）である。

3月11日の大地震では、大船渡市の震度は6弱であった。陸前高田市の人的被害は死者1,555人、行方不明者240人、負傷者不明、住家被害は全壊3,159棟、半壊182棟となっている。

陸前高田市消防団は、8分団33部から構成され、団員数は749名である。このうち、女性団員が6名いる。また、ポンプ自動車かポンプ積載車が36台配備されている。

今回の活動記録は、陸前高田市横田地区を担当する横田分団と米崎地区を担当する米崎分団である。なお、横田分団は担当地区内における被害はほとんど無かったが、被災地に対する応援活動を行っている。

地震による大きな被害はなかった

私は森林組合で仕事をしており、大震災当時

は、横田分団の分団長で、震災当日も市内横田町の山中で伐採作業をしていた。地震が発生した時にも山にいたが、結構大きな揺れだったので、街の方は大変な騒ぎになっているだろうと思い下山した。下山するのに、落石があたりして、すぐには帰れなかった。自宅が被災していないことを確認し、半纏を着て、屯所に行った。

屯所に着いたのは、地震発生から30分位経ってからだった。屯所には、すでに団員が集まっていた、とりあえず地元を巡回し、被害がないかどうかの確認にあたらせた。その後、横田町のコミュニティセンターに分団本部を設置し、そこから各部に指示を出した。横田町内の被害確認には、1時間半から2時間くらいかかり、大きな被害がないことを確認した。

重機で災害対応車が通る道を切り開く

当時、市の防災行政無線で15時25分位に津波襲来の放送が入り、それで津波が来たことを知った。コミュニティセンターに設置した分団本部に待機中、消防無線で消防本部の方からいろいろな依頼があった。これは、陸前高田市内では、横田分団しかまともに動ける消防団がなかったためである。16時位に、消防本部から、県庁の総合防災課に緊急消防援助隊の派遣要請をしてくれという依頼があった。これは、横田町のコミュニティセ

ンターに衛星電話があったので、それで連絡をして欲しいとのことだった。これを受けて、県庁に連絡をした。

さらに、自衛隊が災害派遣で来ることになるので、市街地の高田町内へ通じる道路の瓦礫を撤去して、すみやかに道路を開通させて欲しいとの要請があった。たまたま横田分団管内には、重機を持っている林業会社があり、そこから重機5台を借りることになった。作業を開始したのは20時くらいだった。消防本部の依頼では、市内の廻館橋から竹駒地区のコンビニエンスストアまでの道路を通せば、市街地まで通行できるので、そこまでを急いで開通させてくれ、という依頼だった。

この時は、市内中心部がどうなっているということは全然分からなかった。どんどん進出していく中で、途中から津波で倒壊している家が現れてきて、信じられない光景だった。

作業は、当初、夜通しで行うつもりだったが、途中、危険だということで、12日の夜中1時あたりに作業中止命令がかかり、とりあえず作業は中止し、翌朝6時くらいに再開している。また、10時くらいに、消防本部から消防無線で連絡があり、隣町の住田町へ支援要請を行ってもらえないかという依頼があった。この時点でも、動けるのが横田分団しかないため、住田町への支援要請と消防団の派遣要請を行った。住田町への要請内容は、物資支援と給水車派遣だった。

携帯電話が通じず、消防無線しか通信手段がなかったため、分団の消防車3台のうち1台を分団本部に待機させ、分団長が現場の道路啓開に、本部長が本部に残って消防本部との連絡のやり取りをしていた。なお、他の分団とは、消防無線でも連絡がとれず、どういう状況になっているかは、全く分からなかった。また、分団内部の連絡は、ポンプ車に積載している消防無線とトランシーバーで行った。

地震当日夜は、作業が一時中断されたが、早く始めなければという思いで、寝てられない状態であった。翌日朝からは、山道を通して市の災害対策本部に行って、7時から7時半位までの間に



重機による道路の瓦礫撤去（自衛隊提供）

集合し、そこで指示を受けて、それから現場に戻って、道路啓開、瓦礫撤去、遺体捜索作業を行った。当初は、1日で、廻館橋から竹駒のコンビニエンスストアまでの道路を開通させてくれという要請だったが、瓦礫の量が半端ではなく、さらに、瓦礫の中からは遺体が出てくるため、結局、道路を開通させるには2、3日かかった。それまでには、自衛隊は到着しなかった。作業は、まず団員が先回りして遺体を捜索しながら、あとは重機で瓦礫を撤去していった。しかし、瓦礫を撤去すると、さらにまた遺体が出るため、その遺体を道路脇に寄せたりしたため、結構時間がかかった。また、地震発生翌日には、2人の人が瓦礫の上で一晩明かしたということで、瓦礫の上を裸足で歩いていたのを発見した。その人たちに靴を見つけて履かせて、避難所に収容させた。

横田町から高田町に出向く毎日

その日の活動が終わると、横田町に帰り、また翌朝に高田町に出向くという状況であった。今回の地震は被害が大きかったため、団員も仕事をなくしたり、職場はあるが仕事が再開できない状況だったこともあり、結構な人数の団員が活動に参加してくれた。発災時は、50名から60名くらいが集まり、その後は、ほとんどの団員が活動している。ただし、当初から全員がそろったわけではなく、陸前高田市外で地震に遭い、勤務先から動けなくなった団員が2、3名おり、3日後位に自力

で歩いて横田町に帰って来た。なお、分団の団員1名が犠牲になっており、また、家族を亡くした団員は多く、分団では4名の団員が妻を亡くしている。これは、地震発生当時、家族の勤務先や外出先が陸前高田市の市街地で、そこで津波に巻き込まれたためであった。

当初、団本部に各分団は集まるが、情報交換くらいで、活動の調整等を行っていない。他の分団には、団員が本部に集まれないところもあった。各分団とも、道路がふさがった状態が続いていたので、とりあえずは動ける道路を各地区で確保しようということで、活動していた。その後、重機を持っているのが横田分団だけだったので、被害の大きい高田町内に入って、瓦礫撤去、遺体捜索を行うように指示を受け、活動を行った。

高田町内では、当初、まず大きな道路を確保するように、指示をされた。それに併せて、高田分団と一緒に人海戦術で瓦礫撤去と遺体捜索を行っている。活動は、高田分団と担当する地区を分けて行った。

4月8日に、分団の管轄地域で火災があった。一般の火災で、ゴミ焼きから火が回り、建物と周りの山林を焼いてしまった。当時、分団は遺体捜索と瓦礫撤去の活動のため、管轄地域内には団員がいなく、すぐに対応できなかった。その時、自衛隊が横田小学校と中学校に宿営しており、すでに現場に駆け付けて、消火をしてくれていた。

51日間続いた捜索活動

自衛隊が本格的に入ってきたのは、地震発生後1週間くらいたってからで、横田小に本体が宿営して、それから本格的な活動が始まったと思う。消防団は、自衛隊とは一緒には活動せず、別々に活動していた。警察の応援部隊とは捜索活動を行っており、我々が操作する重機の周りに警官を配置し、遺体が出るのを待つという共同作業を行った。また、緊急消防援助隊の千葉県隊等とは竹藪の中の遺体捜索を共同で行った。



51日間続いた捜索活動（自衛隊提供）

遺体の扱いは、まず発見すると、目印を付けて、動かせる遺体は道路そばまで移動させ、いつ搬送してもいいように毛布や布団などを上にかぶせた。その後、担架で搬送をしたが、遺体の置き場もないため、遺体安置所ができるまでは、とりあえず近い所に何体かをまとめて安置していた。遺体安置所が出来てからは、仮置きしていた場所から安置所まで遺体を搬送した。損傷の激しい遺体もあり、本当に凄惨な状況だった。しかし、慣れというのは本当に恐ろしいもので、だんだん慣れてくると、また遺体がでたか、くらいに思うようになってしまった。結局、遺体捜索は、4月30日までの51日間、ずっと同じ体制で続いていた。途中、どこが区切りなのかと毎日思いながら、やり続けるしかなかった。団員からも、「いつまで続けるのか？」という話が出て、団本部に行って見通しを聞くと、とりあえず目処がつくまでやって欲しいと言われたが、4月30日をもって、捜索打ち切りということになった。また、瓦礫撤去や遺体捜索以外にも被災者用の支援物資の輸送や消防団で必要な物資の輸送も行ってた。これは消防団本部からの要請で、他に輸送してくれるところがなかったために要請したとのことだった。

消防本部の連絡の代替は、携帯電話が通じるまでの10日間位続いた。最初に緊急消防援助隊の応援要請の依頼を受けた時は、自分たちが要請してもいいものだろうかと思った。消防長の命令のようなもので、通信手段が他にないので仕方がなかったが、こんなに大事なことを自分たちが行っているのだろうかと思った。当時、ラジオで陸前高田市の消防本部と連絡取れないと報道されていた

ので、せめて、生存していること位は伝えないといけないと思った。

私自身は、最初はほとんど毎日休まないで活動したが、だんだん暇をみつけられるようになり、何日かは休むことができた。最初の2、3週間は、ほとんどの団員が仕事も行けないということで活動していたが、その後はローテーションで、何人かは出て、何人かは休むという体制を取らせた。しかし、遺体の扱いは精神的にきつかった。『これは団の仕事だろうか?』と思ったが、他に誰もいないので、我々がやるしかないと思った。日か経つにつれて遺体の腐敗も進んでいったので、できるだけ団員には触れさせないようにとの指示を受けていた。発見すると、触らずにすぐに警察に連絡し、対応してもらおうようにしていた。

重機が入らないと進まない

陸前高田市では、一年に一度、津波避難訓練を行っているが、横田分団は海に面していないため、地元で待機して、高田分団の指揮下に入り、警戒などの活動をするようになっていた。今回の地震は例外で、消防本部から直接指示があったので活動している。その後、高田分団長と連絡が取れるようになってからは、高田分団長の指示で動いていた。分団長同士の話し合いで、横田分団が遺体捜索をし、高田分団がそれを搬送するという体制をとった。当初は消防本部からの指示で動いていたが、その後は訓練どおりに高田分団との連携で動くことができた。

今回の活動においては、燃料関係が一番の悩みどころだった。当初、ガソリンが不足しているので、あまりポンプ車を走らせないように指示された。最初は、市の災害対策本部が住田町の給油所に手配をしてくれたり、被災したガソリンスタンドの地下タンクから水交じりではあるが給油してもらっていた。その後は自衛隊にお願いしたりしていた。しかし、その都度、給油方法の指示が変わるので、我々もどうしたらよいか戸惑ってい

た。食糧は、当初1日あたりパン1個とペットボトルの水1本が支給されており、日中は、それで凌いでいた。しかし、それだけでは足りないのので、横田町内会の女性部に、おにぎりの炊き出しをしてもらい、それを現場に持って行った。また、当初は、停電、断水だったので、団員も家に帰ってもなかなか自由に食事をとれないため、夕食の準備もしてもらった。これが1か月以上続いた。

装備としては、丈夫な長靴や手袋、釘を通さない履物が欲しかった。実際、釘を踏み抜いた団員もいた。支援物資で長靴は届いていたが、すぐにゴムが破れたり、釘を通してしまった。そのため、丈夫な安全靴のようなものが欲しかった。また、どこでも通じる携帯電話が欲しかった。横田分団は3つの部があり、それぞれ分かれて作業していたが、各部長への連絡や団本部からの作業指示を伝える連絡手段がなく、直接団員が歩いて連絡しなければならず、本当に困った。

団員の疲労度がピークに達したのは、震災から1週間から10日位後だったと思う。その頃が一番ガソリンの供給方法がはっきりしない時期で、分団内でガソリンのことで揉めていた。その時はみんな疲れてきていると感じた。なお、団員の中では、大きな病気やけがはなかった。団員ではないが、地元出身の大学生が、震災のためわざわざ帰ってきて、消防団の活動と一緒に参加している。日が経つにつれて、消防団員で活動できる人数も少なくなってきていたので、この支援がずいぶん助かった。

また、早い段階で重機をもっとお願いできれば良かった。横田分団以外に重機が入ったのは、建設業組合が動きだしてからだったので、10日はかかった。当初は横田分団の重機しかなかったのので、どこに行っても手つかず状態で、いつまで続くのだろうと、区切りが見えなかったのが問題だった。また、作業の方向性や具体的指示がもう少し欲しいと思っていた。

帰ってあげたいの一心で 搜索活動を継続

岩手県陸前高田市消防団
米崎分団 分団長

熊谷 政之 (47歳)
消防団歴 21年 (漁業)



海の上から陸地へ、全力で逃げた

大震災発生当時は、米崎分団の副分団長だった。米崎分団は、陸前高田市の東側が担当である。地震発生時は、岸から4、5分位の海の上で漁の最中だった。船上で作業していて、甲板が揺れたので地震とわかったが、今までに船が揺れて地震を感じるなどなかったのも、その位すごい揺れだったと思う。その後、船の上で仕事の整理をして、地震発生から15分位で港へ向かった。その時は、津波はすでに来ていて、潮が動いていた。最初に感じたのは引き波で、その中を港に向かった。岸に上がった時には、団員による水門閉鎖は完全に終わっており、沖合の津波監視に何名かが来ていた。他にも堤防に何人か住民がいたようだ。私が船を下りると同時に津波が襲い、津波を背に背負いながら逃げてきたようなものだった。護岸にいる団員と一緒にポンプ車に駆け乗ったが、脇ノ沢駅の踏切の所で、一旦おりて、そこからは走りながら、近くにいた住民に「逃げろ逃げろ」と呼びかけた。私たちは、直接護岸から来たので、津波が越えたのを見ていたが、住民の人たちはそれを知らなかった。

津波が堤防を越えた時点で、線路を越えてずっと上まで来ると予想したので、「こんなところに居ないで早く上がれ」と、住民に声をかけていた。避難誘導をしながら、避難所になっている公

民館も危ないだろうと感じ、「さらにもっと上にあがれ」と叫びながら広報を行った。

かなり下の方（海に近く）にいた住民にも声をかけた。結局、犠牲になった住民は、一旦、避難していながら、津波が来るまで30分あったので、忘れ物などで自宅に戻って被災した者が多かったようだが、最初から避難しなかったことで犠牲になった者もいたようだ。ただし、高齢者ばかりが取り残されたという感じではない。また、ポンプ車だけは何かあっても守らなくてはいけないと思いい、ポンプ車を先に上に移動させた。そのため、自分の車は流されてしまった。

なお、確認しただけでも4、5隻ほどの漁船が、沖合に逃げたようだ。私が逃げている時も、船で何人かが沖合に出ていくのが見えた。船で逃げた者たちも、何人か助かったようだ。

自分が逃げるので精一杯だった

今回の津波では、自分が逃げるので精一杯だった。逃げる途中で、高齢者や体の不自由な人の避難の介助はしていない。動けない人もいたが、この人を助けたら自分も死んでしまうと思いい、そのまま行ってしまった。結局、その人は助かったようだ。また、車で逃げた住民もいた。ただ、もともと人口が少ない地区で、渋滞はしていなかった。車で逃げた者は助かった。他に、車で逃げ



米崎地区の海岸部（国土地理院）

ようとしたが、あわてて車を捨てて逃げた者もいた。結局、地震の揺れでは逃げず、堤防を水が越えたのをきっかけに逃げた者が多くいた。私の妻もそれで逃げ遅れて亡くなっている。

堤防を越えるとは思ったが、越えてからの勢いが想定外だった。昨年のチリ地震津波の時の印象が頭にあり、静かにひたひたと水が来る程度の想像しかできていなかった。一気に水が湧いて流れて、100mを戦車と競争しているようなもので、勝てるわけがない。妻は自分よりは少し手前を逃げていたようだが、たまたま自分は坂のきつい所に上ったから助かったが、私の妻は低い所に逃げて、足が遅いので後ろから襲われた。団員でも家族を亡くされた人は、たくさんいる。家族、身内まで含めると、ほとんどの団員ではないか。

一度避難した後、高台から様子を見ていて、日が明るいうちに3人ほどを救助した。そのうち、2人は女の子と私の家の隣のおばあさんで、このおばあさんは、おじいさんと息子と3人で2階に避難していて津波に襲われたが、屋根が割れてそこから出てきて、気が付いたら高台の下の田んぼの中に居たようだ。こちらに向かって手を振っているのを見つけて、瓦礫をどかして助けに行った。その他に、津波で孤立した場所にいた人を助けた。16時か17時くらいに車両火災もあったが、放置していた。その後、気になるということで、その周辺にあった消火器やバケツの水で消火した。

当日、ヘリが飛んでいるのは確認したが、自衛隊が本格的に入ってきたのは道路が開通した1週

間後くらいである。なお、自衛隊と協力しての活動はしていない。この地区に入った自衛隊は、しばらくは避難者の生活支援活動のみを行い、捜索活動は消防団のみで行っていた。

生存者の捜索活動

次の日になって、生存者を捜しに行ったが、余震が多く、また津波が来ると思い、高台にすることにした。中学校には生徒と近所の人が70人程はいた。中学生は下校前だったので、ほぼ全員がいた。小学生は、迎えに来てもらった児童1人が犠牲になった。

避難した人たちを、余震が来るたび高台にあげたりした。また、その日の食べるものの準備を行うように指示したが、自治会などで自主的に対応することになり、そちらに任せた。翌日、明るくなってから、分団の第1部～第3部の屯所のうち小学校にある第3部だけ残っていたので、そこに行った。

その後、3日間は歩いて捜索を行ったが、警報が出っ放しだったので、下の海の近くまでは行けず、救命胴衣を着けて、周りの様子をうかがう程度で、ガレキの表面を見る程度の捜索活動であった。また、2、3人の組をつくり、孤立した地区がどこで、そこに何人が避難しているかを確認した。全体の状況が分かったのは3日目くらいである。自分の家族の安否もわからない中、命令系統もはっきりしていなかった。私も中学校を離れられず、2日間は中学校にいた。まずは、動ける団員で捜索したが、道路が全部寸断されていて、瓦礫をよけながら捜索をしていた。

遺体はあちこちにあったが、生存者の救助が優先だったことと、団員の安全を優先させていたので、搬出しやすい遺体だけを搬送した。一週間は、生存者の捜索をしており、その後、瓦礫撤去が始まってから、発見した遺体を搬出していた。

3日目の朝、津波の警報が解除されてから、本格的な活動に移ろうと、何人かは海の近くに下が

って様子を見に行ったが、その状況を見て呆然として帰ってきた。何人かの遺体を収容し、毛布にくるんで、ポンプ車で直接病院に運んだ。連絡手段がなく、救急車も呼べなかったため、自分たちで直接、遺体を運んだ。3日目以降は本格的な搜索活動には入ったが、余震があるたび恐ろしくて捗らなかった。

最初は遺体発見しても、どういう手順で処理すればいいかわからず、ただ運んだだけであった。後から、警察に処理方法を指示されたり、どこでどんな状態で発見したかなど細かく聞かれた。最初は、いろいろとめんどうだったが、後になると警察も男女別を聞くくらいで、ほとんど詳しいことを聞かなくなった。

帰ってあげたいの一心で搜索を継続

遺体は、遺体安置所で検視したが、遺体を洗うのに水が必要だったので、ポリタンクで川の水を運んだ。これらの活動も、他に誰もやる人がいないので消防団でやった。水の搬送は、当初は3日に1回だったが、だんだん遺体が増えて、毎日1回となり、多いときは午前と午後で1日2回運んだ。遺体は日が経つにつれて増えたが、これは、自分たちが道路を開通させたことにより、遺体の回収ができるようになったためである。

遺体の回収は1週間～10日程、ほぼ全員で行った。2週間ほどで、近隣市町村の電気が回復して仕事が再開したので、仕事のために活動できなくなる団員が増えていった。また、建設業協会の活動が立ち上がったので、そちらに活動の主体が移って行った。

瓦礫撤去も分団が行っていた。重機は、近くにいる知り合いから提供してもらった。瓦礫撤去というよりも、道を作る作業をしていた。しかし、瓦礫の中に生存者がいたらと思うと、勢いよく作業が行えず、そろそろと作業していたので、普通より時間がかかった。

結局、遺体の処置は、4月の上旬位まで消防団



搜索活動（自衛隊提供）

が行った。それより後は、遺体もそれほど発見されなくなったことと、警察の応援も来たため、遺体を見つけたら警察に連絡して搬送してもらうという手順となった。当初は、警察も治安維持、避難所の警戒、安置所の対応などの仕事が多く、遺体の収容まで手が回らなかったようだ。また、安置所が手狭で、一度に40体～50体の遺体が同時に出てきたときは、安置所をたらい回しにされたこともあった。また、安置所が足りなく、学校の体育館を安置所に指定するのも時間がかかったようで、一時は教室まで使って、200体を超える遺体を安置した時もあった。

我々の地域の遺体は、まだ五体満足だったからよかったが、高田町方面の遺体は損傷がひどかったらしい。最初の3日目位までは、あまりのひどさに遺体搬送できなかったそうだが、1週間もすれば慣れてしまったようだ。当時は寒かったからそうでもなかったが、2週間もたつと匂いが結構きつくて大変だった。はじめの3、4日は、生存者を探す気持ちでやっていたが、まさか自分たちで遺体搜索するとは思っていなかった。みんな多少なりとも身内を亡くしているのだから、遺体を見つけてあげたい、帰してあげたいという気持ちがあったために活動した。

搜索活動は、4月30日で一応の区切りをつけた。その後は、仕事の無くなった者など4、5名で搜索をしていた。特に、分団の仲間が高田町内で行方不明になっていたのだから、その付近を搜索していた。これが5月の連休過ぎまで続いた。

その他、避難者対応に団員2名を専属につけた。そのうち1名が、小学校の避難所の代表になった。当初、消防団は避難所の物資調達のみでは

なく、運営もやっていた。半纏を着ている者に任せるのがよかったようで、担当の団員は若い者だがみんな言うことを聞いてくれた。避難者名簿の作成や物資調達などを行ったが、その後はボランティアにも手伝ってもらった。

団員が犠牲にならないための線引が必須

消防団員では、2名が犠牲になった。団員は、いろいろな職業の者がいる。地震発生当初、近くにいた団員が集まって活動を開始した。2日目に確認した時は、7、8名が消息不明だったが、ほとんどが市内にいなかった。それらの団員も、徐々に地元に戻ってきて、最終的には2名が戻ってこなかった。そのうち、1名が市役所勤務で犠牲になり、1名はまだ行方不明である。

活動に使う軽油は、船のためにストックしておいたドラム缶があったので、緊急的にそこから調達した。また、流れ着いて転がっているドラム缶を見つけて使った。ガソリンも同じような状況だった。団員の食事は避難所から炊き出しをもらっていた。市からの食糧支援などが来たのは、だいぶ後になってからだった。炊き出しは避難所ごとにやっていて、近所から米などをもらったりしていたようだ。当初は、屯所に夜警用のカップラーメンなどの買い置きがあったので、それで食いつないでいた。後は、申し訳ないが、搜索途中で流れているものを拾ったりした。団員で体調不良になった者は何人かいた。他には、釘を踏み抜いて怪我した者がたくさんいた。途中で、コミュニティセンターに県立病院の救護所ができたので、怪我をすればすぐ行かせるようにした。ある程度経過してから、各自休みをとってもらっていた。当初、活動していた団員は40名だったが、その後は20名~30名になり、最終的には10名になった。

携帯電話は地震後30分で通じなくなり、他に連絡手段もなかった。そのため、何か連絡をとりたい時は、団員を伝令に行かせるしかなかった。無線機はあったが、屯所に置いていた充電器が流さ

れたため、緊急時以外は使うなど指示されていた。

水門は毎月第一日曜日に点検するようになっていたので、水門を閉めることに関しては慣れていた。遠隔操作のものはないが、手動でも5分もあれば閉められるので問題はなく、報告を含めても10分もあればできる。海面監視の任務はなくなったので、任意で様子を見ていた。なお、通信網は地震では生きていたが、津波でだめになった。

課題として、消防団員には、まず自分の命を守ってほしい。他の分団で救助活動をしていて犠牲になった者の話をたくさん聞いた。団員が最後まで残って、みんなが避難するのを確認していると、最後は団員が犠牲になってしまう。どこかで線を引きてもらい、それをきちんと住民に理解してもらう必要がある。その上での生命・財産を守るならいいと思う。

また、訓練はいざという時のために必要だと思う。これでいいということはないと思うので、最悪の事態を想定してやる必要がある。さらに、高台へまっすぐ伸びる避難路を、半径5km以内に一箇所ずつくらい整備してほしい。高台への避難が道路の渋滞で困難なところもあったので、広い避難道路があればいいと思う。

今回の大震災で分団の屯所がなくなったので早く整備して欲しい。また、ポンプ車を野外に駐車しているので、これを屋根つきの車庫に入れたい。さらに、通信手段は無線機が1台しか使えないので整備して欲しい。分団内相互の通信ができる無線機を各車両にあればよいと思う。

なお、電波が山越えできなかつたり、ロケーションの悪い所だと聞きづらいということがあるので、性能のよいのが欲しい。その他の装備として、釘が通り抜けない長靴、ライトが付いたヘルメット、ソーラー蓄電池などで夜警などに使えるものの整備が望まれる。